

## 介護者・高齢者間のコミュニケーション態度と介護意識との関連

満田友美\* 児玉憲一\*

A relationship between caregivers-older people communication attitude and awareness about caring

Tomomi Mitsuda\* Ken-ichi Kodama\*

The purpose of this study was to investigate a relationships between caregivers-older people communication attitude and awareness about caring of family caregivers. Subjects were 221 family caregivers, who were asked to answer a scaled set of questionnaires about Communication Attitude, Caregiving Burden and Positive Appraisal of Caring. The result of this study were as follows;(1) positive communication between family caregivers and older people related with Positive Appraisal of Caring, (2)negative communication between family communication and older people related with Caregiving burden.

**Keywords :** family caregivers, communication, caregiving burden, positive appraisal

### 問題

人口の高齢化が急速に進展し、高齢社会に至った現在、身の回りのことをすべて一人でこなせる健康状態の良い高齢者ばかりでなく、日常生活動作が制限され、第三者の世話を受けざるを得ない要介護高齢者の数も増加していることは容易に想像できる。このような要介護高齢者の増加に伴い、彼らの介護に携わる家族介護者の心理的問題が注目されているが、家族介護者の心理的問題としては、大きく分けて介護負担感、介護肯定感の2つが考えられる。

介護負担感とは、介護により介護者が感じるさまざまな障害、あるいは介護することにより体験される心理的圧迫と社会的困難と定義される(内藤・小山田, 2000)。介護者の介護負担感に関連する要因については、要介護高齢者における問題行動(徘徊, 暴力など)、一日の介護量、介護時間の長さなどが指摘されている。(東野, 2005; 櫻井, 1998)。またこういった要因とは別に、佐々木・篠崎・徳田・徳永・池田(1994)は、被介護者と介護者との人間関係が悪い場合、精神的な負担感が強くなることを示している。

一方、介護肯定感は、介護によって得られる喜びや満足感を示す。介護負担感と同様に、介護肯定感に関しても、それに関連する要因の検討が行われており、広瀬・岡田・白澤(2005)によると、

---

\*広島大学大学院教育学研究科(Graduate School of Education, Hiroshima University)

家族や近隣などから得る情緒的サポートおよび手段的サポートが介護に対する肯定的評価と関連しているという。また、このような社会環境要因とは別に、陶山・河野・河野(2004)は、介護肯定感の形成には介護者と高齢者との関係の良さが重要であることを明らかにしており、Farran・Keane-Hagerty・Salloway・Kupferer・Wilken(1991)も介護者が高齢者とのよい関係を認識することが肯定感の要素として重要であると考えている。

このように家族介護者に関する心理学的問題を扱った介護負担感に関する研究、介護肯定感に関する研究を概観すると、そのどちらにも共通する要因として、介護者と高齢者との人間関係が挙げられている。つまり、家族介護者が高齢者と肯定的な人間関係を構築出来ていると認識し、その人間関係に満足していることは、介護者の精神的健康に大きな影響を及ぼすのである。

介護者と高齢者の人間関係に影響を及ぼす要因は様々であるが、その中でも両者間のコミュニケーションは最たるものであると考えられる。例えば、東野(2003)は、在宅で提供される家族介護内容の種類として「日常会話・声かけ」が最も高い頻度で実施されていると報告し、三浦・荒井・山崎(2004)は、円滑に質の高い在宅介護を行うためには、要介護高齢者とその家族介護者との間に良好なコミュニケーションが確立されていることが重要な条件であるとしている。このことから、介護において、介護者と高齢者間で交わされるコミュニケーションに焦点を当てることにより、在宅介護の質の向上、介護者の心理的問題である介護負担感および介護肯定感(以下、介護意識とする)について理解を深めることが出来ると考えられるが、両者間のコミュニケーションに関する調査研究は少なく、介護者と高齢者間のコミュニケーションと介護者の介護意識との関連について検討した研究も見当たらない。

そこで本研究では、介護者と高齢者の人間関係を規定する要因として、介護者・高齢者間のコミュニケーション態度に注目し、在宅で高齢者を介護している主たる家族介護者を対象に、介護者・高齢者間のコミュニケーション態度と、介護者の持つ介護意識とがどのように関連しているかについて検討を行った。

## 方法

### 1. 調査対象者

A 県内に在住し、在宅で高齢者を介護している主たる家族介護者 211 名を対象に質問紙調査を実施した。なお、本研究では介護をしている家族介護者(以下、介護者)と、介護を受ける高齢者(以下、高齢者)とが、普段の日常生活において言語コミュニケーションを行っていることを前提としたため、認知症の高齢者を介護している家族介護者は調査対象としなかった。

### 2. 調査手続き

2006 年 10 月下旬から 11 月中旬にかけて、質問紙を配布・回収した。質問紙を配布には、A 県内に住むヘルパー、栄養士、主婦に協力を依頼し、スノーボール・サンプリングを行った。質問紙の回収は、上記の調査協力者による直接回収と郵送法による回収の 2 種類を組み合わせで行った。

### 3. 質問紙の構成

#### (1) コミュニケーション態度の測定

平山・柏木(2001)によって作成された夫婦間コミュニケーション態度尺度を用いた。相手より上

位に立ち、威圧的な態度をとることを表す項目からなる「威圧(5項目)」,相手の立場に立ち、共感的に応じる態度をとることを表す項目からなる「共感(5項目)」,相手への親和的接近を示す態度をとることを表す項目からなる「依存・接近(7項目)」,相手の言い分を無視し,相手とのコミュニケーション自体を回避する態度をとることを表す項目からなる「無視・回避(4項目)」,の4つの下位尺度から構成された,合計21項目の尺度である。調査対象者である介護者に対して,各質問項目につき①「自分(介護者)の,相手(介護している高齢者)に対するコミュニケーション態度」,および②「相手(介護している高齢者)の,自分(介護者)に対するコミュニケーション態度」を別々に設問し,それぞれ4段階「1.よくある(4点)」から「全くない(1点)」の4件法で評定を求めた。(例えば,①の場合であれば,「相手に元気がないとき優しい言葉をかける」,②の場合であれば,「あなたに元気がないとき優しい言葉をかける」となる。)これにより,評定者は介護者のみでありながら,「介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度」,「高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度」という2種類のコミュニケーション態度を測定した。なお,本研究においては,「介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度」および「高齢者の介護者に対するコミュニケーション」は,すべて介護者の主観的な評定であることを考慮し,前者のコミュニケーションを「介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度認知」,後者を「高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度認知」と表記を改めた。

### (3) 介護負担感の測定

櫻井(1999)によって作成された介護負担感尺度を用いた。介護者に日常や社会生活に対する制約や拘束感が生じている状態であることを示す「拘束感(5項目)」,介護の重圧がかかり,介護者が心身ともに追い詰められている状態であることを示す「限界感(4項目)」,介護者に高齢者や家族,親戚などとの軋轢や葛藤が生じている状態であることを示す「対人葛藤(5項目)」,介護に対する経済的な負担感が生じている状態であることを示す「経済的負担(2項目)」,の4つの下位尺度からなる,全16項目の尺度である。各質問項目につき,「1.非常にそう思う(4点)」から「4.全くそう思わない(1点)」の4件法で評定を求めた。

### (4) 介護肯定感の測定

櫻井(1999)によって作成された介護の肯定的評価尺度を用いた。これは,介護者が介護役割や高齢者との関係に満足している状態であることを示す「満足感(9項目)」,介護者が介護を通して,自らの成長を感じていることを示す「自己成長感(3項目)」,介護者が現在介護している高齢者の介護を,今後も続けていく意志を持っている状態であることを示す「介護継続意志(2項目)」,の3つの下位尺度からなる全14項目の尺度である。各質問項目につき,「1.非常にそう思う(4点)」から「4.全くそう思わない(1点)」の4件法で評定を求めた。

### (5) フェイス項目

介護者の年齢,性別,高齢者の年齢,高齢者との関係(続柄)を尋ねた。

## 結果

在宅で高齢者を介護している主たる家族介護者 211 名に質問紙を配布し、134 名分を回収した(回収率は 63.5%)。そのうち、無回答などの欠損値が著しく多いデータ、または外れ値とみなしたデータ 27 名分を分析から除外した結果、107 名分の有効回答数を得た(有効回答率 50.7%)。

### 1. 各変数の基本統計量

質問紙に回答した介護者は、女性介護者 92 名(86.0%)、男性介護者 15 名(14.0%)から構成されていた。介護者全体の平均年齢は 55.7 歳( $SD=9.75$ )、範囲は 26 歳から 76 歳であった。うち、50 代が 51 名(47.7%)と最も多く、次いで 60 代 26 名(24.3%)であった。一方、被介護者である高齢者は、平均年齢 84.7 歳( $SD=9.75$ )、範囲は 70 歳から 100 歳であった。高齢者の続柄別の内訳は、義母が 40 名(37.4%)と最も多く、次いで実母 31 名(29.0%)であった。

介護負担感尺度は、平均値が 34.98 点( $SD=10.56$ ; 範囲 14-56)で、介護の肯定的評価尺度は平均値が 37.73 点( $SD=7.70$ ; 範囲 14-56)であった。

### 2. コミュニケーション態度認知と介護意識との関連

平山他(2001)の先行研究に従い、コミュニケーション態度尺度の 4 つの下位尺度のうち、「共感」、「依存・接近」をポジティブなコミュニケーション態度、「威圧」、「無視・回避」をネガティブなコミュニケーション態度として、コミュニケーション態度を 2 つに分類した。

#### (1) 介護者の高齢者に対する、ポジティブなコミュニケーション態度認知と介護意識との関連

介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度認知と介護意識との関連について検討を行った。介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度得点のうち、「共感」、「依存・接近」の 2 つの下位尺度の得点を合算し、ポジティブなコミュニケーション態度得点を算出した。そして算出されたポジティブなコミュニケーション態度得点の平均値(33.61)を境に、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群( $N=52$ )とポジティブなコミュニケーション態度認知低群( $N=52$ )の 2 つに群分けし、群間で介護負担感尺度および介護肯定感尺度の得点に違いが見られるかどうか、対応のない  $t$  検定で比較した。

その結果、Table 1 に示すように、介護の肯定的評価において、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群がポジティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった( $t(105)=2.45$ ,  $p<.01$ )。介護負担感においては、群間で有意な差は見られなかった。

Table 1 介護者の高齢者に対するポジティブなコミュニケーション態度別にみた介護負担感および介護の肯定的評価の得点

	ポジティブなコミュニケーション 態度認知高群(N=53)	ポジティブなコミュニケーション 態度認知低群(N=54)	t 値
	平均値(SD)	平均値(SD)	
介護負担感	35.38(10.52)	34.59(10.67)	0.38
介護の肯定的評価	39.53(7.56)	35.96(7.49)	2.45**

\*\* $p < .01$

### (2) 介護者の高齢者に対する、ネガティブなコミュニケーション態度認知と介護意識との関連

介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度得点のうち、「威圧」、「無視・回避」の2つの下位尺度の得点を合算し、ネガティブなコミュニケーション態度得点を算出した。ネガティブなコミュニケーション態度得点の平均値(19.44)を境に、ネガティブなコミュニケーション態度認知高群(N=52)とネガティブなコミュニケーション態度認知低群(N=52)の2つに群分けし、群間で介護負担感尺度および介護肯定感尺度の得点に違いが見られるかどうか、対応のないt検定で比較した。

その結果、Table 2に示すように、介護負担感において、ネガティブなコミュニケーション態度認知高群がネガティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった( $t(105)=2.42, p < .01$ )。介護の肯定的評価においては、群間で有意な差は見られなかった。

Table 2 介護者の高齢者に対するネガティブなコミュニケーション態度別にみた介護負担感および介護の肯定的評価の得点

	ネガティブなコミュニケーション 態度認知高群(N=49)	ネガティブなコミュニケーション 態度認知低群(N=58)	t 値
	平均値(SD)	平均値(SD)	
介護負担感	37.61(10.60)	32.76(10.08)	2.42**
介護の肯定的評価	36.80(7.49)	38.52(7.85)	1.15

\*\* $p < .01$

### (3) 高齢者の介護者に対する、ポジティブなコミュニケーション態度認知と介護意識との関連

次に、高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度認知と介護意識との関連について検討を行った。高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度得点のうち、「共感」、「依存・接近」の2つの下位尺度の得点を合算し、ポジティブなコミュニケーション態度得点を算出した。算出されたポジティブなコミュニケーション態度得点の平均値(30.45)を境に、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群(N=57)とポジティブなコミュニケーション態度認知低群(N=50)の2つに群分けし、群間で介護負担感尺度および介護肯定感尺度の得点に違いが見られるかどうか、対応のないt検定で比較した。

その結果、Table 3 に示すように、介護負担感において、ポジティブなコミュニケーション態度認知低群がポジティブなコミュニケーション態度認知高群に比べて有意に得点が高かった ( $t(105)=2.52, p<.01$ )。また、介護の肯定的評価においては、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群がポジティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった ( $t(105)=2.11, p<.05$ )。

Table 3 高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度別にみた介護負担感および介護の肯定的評価の得点

	ポジティブなコミュニケーション 態度認知高群(N=57)	ポジティブなコミュニケーション 態度認知低群(N=50)	t 値
	平均値(SD)	平均値(SD)	
介護負担感	32.63(10.12)	37.66(10.50)	2.52**
介護の肯定的評価	39.18(7.60)	36.07(7.56)	2.11*

\*\* $p<.01, *$  $p<.05$

#### (4) 高齢者の介護者に対する、ネガティブなコミュニケーション態度認知と介護意識との関連

同様に、高齢者の介護者に対するコミュニケーション態度得点のうち、「威圧」、「無視・回避」の2つの下位尺度の得点を合算し、ネガティブなコミュニケーション態度得点を算出した。そして算出されたネガティブなコミュニケーション態度得点の平均値(30.45)を境に、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群(N=57)とポジティブなコミュニケーション態度認知低群(N=50)の2つに群分けし、群間で介護負担感尺度および介護肯定感尺度の得点に違いが見られるかどうか、対応のないt検定で比較した。

その結果、Table 4 に示すように、介護負担感において、ポジティブなコミュニケーション態度認知低群がポジティブなコミュニケーション態度認知高群に比べて有意に得点が高かった ( $t(105)=2.52, p<.01$ )。また、介護の肯定的評価においては、群間で有意な差は見られなかった。

Table 4 介護者の高齢者に対するコミュニケーション態度別にみた介護負担感・介護の肯定的評価の得点

	ネガティブ高群(N=56)	ネガティブ低群(N=61)	t 値
	平均値(SD)	平均値(SD)	
介護負担感	38.25(10.49)	31.39(9.49)	3.53***
介護の肯定的評価	37.11(7.51)	38.41(7.92)	0.87

\*\*\* $p<.001$

## 考察

### 1. ポジティブなコミュニケーション態度認知と介護意識との関連

介護者の高齢者に対するポジティブなコミュニケーション態度認知では、介護の肯定的評価においてのみ、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群がポジティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった。また、高齢者の介護者に対するポジティブなコミュニケーション態度認知では、介護負担感において、ポジティブなコミュニケーション態度認知低群がポジティブなコミュニケーション態度認知高群に比べて有意に得点が高かった。介護の肯定的評価においては、ポジティブなコミュニケーション態度認知高群がポジティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった。この結果から、介護者・高齢者間のポジティブなコミュニケーション態度認知は、介護意識の中でも特に、介護の肯定的評価と密接に関連していることが示唆された。介護者が高齢者と相互にポジティブなコミュニケーションが出来ていると認識しているということは、介護者と高齢者の間には良好なコミュニケーションが成立し、人間関係も良いと考えられる。陶山他(2004)は、介護肯定感の形成には介護者と高齢者との関係の良さが重要であるとしているが、本研究の結果を踏まえると、介護者と高齢者間に共感的で、親和的なコミュニケーションが成立していることが、介護者と高齢者との関係の良さを規定する要因の一つとも考えられる。

### 2. ネガティブなコミュニケーション態度と介護意識との関連

介護者の高齢者に対するネガティブなコミュニケーション態度認知では、介護負担感において、ネガティブなコミュニケーション態度認知高群がネガティブなコミュニケーション態度認知低群に比べて有意に得点が高かった。また、高齢者の介護者に対するネガティブなコミュニケーション態度認知でも同様の結果が得られた。このことから、ネガティブなコミュニケーション態度は介護意識の中でも特に、介護負担感と密接に関連しており、高齢者と互いにネガティブなコミュニケーション態度で接していると認知する介護者は、高い介護負担感を有している危険性があることが示唆された。介護者が高齢者に対して威圧的な態度をとれば、高齢者も同様の態度で応じてしまったり、自身の献身的な世話にもかかわらず、高齢者から辛く当たられたり、無視される場合、介護者が高齢者とのコミュニケーション自体を回避するというような悪循環に陥ることも考えられる。佐々木他(1994)の、被介護者と介護者との人間関係が悪い場合、精神的な負担感が強くなるという知見を踏まえると、人間関係の悪化が招く介護者の介護負担感の増加は、介護者と高齢者間のネガティブなコミュニケーションに起因していることも大いに推察される。

### 3. 今後の課題

介護者自身が、自分も高齢者も相互にポジティブなコミュニケーション態度で接していると認知している場合、介護者は介護の肯定的な側面により目を向けやすくなるが、相互にネガティブなコミュニケーション態度で接していると認知する場合は、介護に対する負担感をより感じやすくなる可能性が示唆された。しかし、介護者の介護負担感や介護に対する肯定的評価に影響を及ぼす要因としては、コミュニケーション以外にも様々なものが報告されていることから、本研究の結果のみで一概にコミュニケーションと介護者の介護意識との因果関係を特定することは出来ない。ただし、

Terri・Elizabeth・John・Amy(2005)によると、介護者・患者間のコミュニケーションの役割は、介護負担感に関わる要因の中でも、変化させられるかもしれない要因であると言われている。つまり、介護者と高齢者が共に、二者間のコミュニケーションの現状や問題点に気づき、それを改善していく努力をすることは、大いに意義があることなのではないだろうか。

また、本研究において測定したコミュニケーション態度に関しては、介護者からの評定にのみ基づいているため、介護者・高齢者間コミュニケーション態度の様相を正確に把握したとは言いがたい。そのため、今後は、介護者のみならず、高齢者からの評定も含めた包括的な検討が必要であると考えられる。

## 引用文献

- Farran, C. J., Keane-Hagerty, E., Salloway, S., Kupferer, S., & Wilken, C. S. (1991). Finding meaning: an alternative paradigm for Alzheimer's disease family caregivers. *The Gerontologist*, **31**, 483-489.
- 東野定律 (2005). 在宅要援護高齢者の問題行動と主介護者の介護負担感の関係 日本保健科学学会誌, **7**, 250-256.
- 東野定律・筒井孝子 (2003). 介護保険制度実施後の痴呆性高齢者に対する在宅の家族介護の実態 東京保健科学学会誌, **5**, 244-257.
- 平山順子・柏木恵子 (2001). 中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？ 発達心理学研究, **12**, 216-227.
- 広瀬美千代・岡田進一・白澤政和 (2005). 家族介護者の介護に対する肯定的評価に関連する要因 厚生指標, **52**, 1-7.
- 北島英治・小山秀夫・藤林慶子 (1993). 老人の「日常生活動作能力(ADL)」と「基本的介護必要度」に関する簡易スケールの作成 社会老年学, **38**, 59-63.
- 三浦宏子・荒井由美子・山崎きよ子 (2005). 在宅要介護高齢者ならびにその家族介護者における主観的言語コミュニケーション満足度の関連要因 日本老年医学会雑誌, **42**, 328-334.
- 内藤恭子・小山田隆明 (2000). 在宅介護者の介護負担感に関する心理学的研究(1) 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, **49**, 143-154.
- 櫻井成美 (1998). 在宅要介護老人の介護者の介護経験—負担感, 肯定感とその関連要因の検討— 学校教育学研究論集, **1**, 21-30.
- 櫻井成美 (1999). 介護肯定感がもつ負担軽減効果 心理学研究, **70**, 203-210.
- 佐々木洋子・篠崎幸子・徳田由紀・徳永あいこ・池田澄子 (1994). 寝たきり老人の介護者の負担感軽減の要因 老人看護, **25**, 46-48.
- Terri, R. F., Elizabeth, H. B., John, R. O., & Amy, L. B. (2005). Unmet Desire for Caregiver-Patient Communication and Increased Caregiver Burden. *Journal of the American Geriatrics Society*, **53**, 59-65.
- 陶山啓子・河野理恵・河野保子 (2004). 家族介護者の介護肯定感の形成に関する要因分析 老年社会学, **25**, 461-470.